優秀賞（釧路人権擁護委員連合会長賞）

目に見えない病気をするという事は

釧路市立阿寒中学校　一年　駒井　隆佑

僕は一見、見た目は、とても元気そうにみえます。ですが、目と足に病気を抱えています。そのことで、僕は悲しい思いをしています。人から見たら、目に見えない病気をしていると言う事は、その病気だけでなく、心も立場も大きく変わっていくということを身をもって体験しています。

人権について調べてみると、いかなる地位とも関係なく、安心して生きる権利と書いていました。また、人権には五つの種類があるそうで、僕は平等権について書こうと思います。平等権とは差別されない権利のことを言うそうです。差別とは、その人を社会の中で不当に扱ってしまうことだそうです。では、不当とは何か調べてみると、やめてくださいと伝えているのにも関わらず、相手方がそれを拒否することだと書いてありました。〔安心して生きる権利〕今の僕は安心して生きていません。〔差別されない権利〕平等に扱われていると思いません。〔不当〕できないと言っても、理解してもらえません。

僕は、もともと運動神経が良く、幼稚園から大好きなアメフトをやっていました。僕は足が早くて、高く上がったボールを取るのもすごく得意だったので、試合には必ず選ばれていたし、チームで勝ってみせるという強い気持ちでやっていました。しかし、小学四年生の時にシーバー病という病気にかかりました。成長期によくある病気とのことでした。病院の先生からは、安静にするように言われました。また、継続的に走らないようにすること。足の使わない体育だったらやってもいいが、痛かったらすぐ止めることと医者に言われました。その時、僕はショックだったけど、安静にしていれば治るから大丈夫と思っていました。しかし、思ってもいなかった悩みが僕を襲ってきました。それは、周りの人から〔見た目元気そうじゃん、病気って嘘だったりして〕〔ただの怠け者だね〕〔体育やりたくないだけじゃない？〕〔それぐらいだったらできるしょ。〕そんな言葉が飛んでくるようになりました。病気をして自分でも辛いのに、周りからの言葉にこんなに傷つき、悲しい思いをするとは思ってもいませんでした。目に見えない病気というのは辛いなと思います。見た目元気そ

うだから、病気は嘘という言葉は差別だと思います。松葉杖を持っていたら、病気と認めてくれますか。痛くてできないと言っても、それぐらいだったらできるでしょうと拒否されてやらさせるのは不当に当たると思います。それに加えて、目の病気は、なぜかオレンジ色の光を見ると頭が痛くなってめまいがしたり、目が痛くなります。医者からは視覚過敏症と言われました。過敏からくる偏頭痛発作も起きます。そして、小学四年生のときに目に見えない病気を発症して、中一になった僕は周りの目を気にするようになっていきました。本当の気持ちが言えなくなりました。ここで体調悪いって言ったら怒られるのかな。それぐらいできるでしょと言われるのかな。自分の気持ちを伝えたところで、否定される位なら、我慢するしかない。結果、目も足も悪化してしまいました。これはもう安心して生きる権利がないのと同じだと思います。松葉杖や眼帯など、目に見えるような病気だったら、人からひどい言葉を浴びせられることなどは無いのかもしれないと思いました。僕も含めて、人間は目に見えるものは信じ、目に見えないものは信じないという癖があるのだと思います。目に見えない病気と言うのは、この世の中にたくさんあります。心の病気も見えません。自分の気持ちを伝えたところで、否定されたり、馬鹿にされたり、疑いの目で見られたりすると、だんだん立場が低くなっているように感じます。それは平等ではないと思います。

僕は、この病気の経験を通し、人を見た目で判断してはいけないということを学びました。目に見えない病気をするという事は、病気との戦いだけではなく、人からの厳しい言葉に耐えなければならなくなり、気づけば自分に自信がなくなり、自己肯定感も低くなっていきます。

今回この作文を通して、僕は大切なことを気づかせていただきました。それはどちらか一方だけ、我慢をしたり、意見を押し通そうというのではなく、互いに、理解し合うことが大切なのだということです。今、僕にできることは、目に見えない病気をしているからこそ、自分の気持ちや、身体の状態をきちんと伝えるという事です。そして、僕自身も相手の気持ちを理解し認め、お互い対等に平等になれるように、良い落とし所を見つけていける人間になっていきたいと思います。